第 11 回

弥生のテクノポリス　～　矢部川の「災禍」と「恩恵」

石材が生み出した２０００年の石文化

平成 26（2014）年 5 月

九州北部豪雨（平成２４年７月）は矢部川の堤防決壊で柳川などの市街地を水浸しにし、その支流の笠原川、星野川上流で、八女市黒木や星野村などに大きな土砂災害をもたらした。その災害復旧工事を見るため、今も道路決壊で片側通行が続く矢部川沿いの道路を遡った。

「山が消えた」と言われた笠原川の大土砂崩れ跡は、山腹上部は白いコンクリート枠がびっしりと張り巡らされ、工事は半分くらいの進捗状況だったし、名産・八女茶の茶畑は緑の列が無残に引きちぎられたままだった。災害から２年、天災の傷跡はなお、癒えておらず、仮設住宅での人々の不自由な暮らしも続いていた。老齢化、人口流失が続いていたところへ、生活の基盤となってきた茶畑、棚田を破壊され、過疎化が一層進み、集落も崩れるのではないか、と地元の人々は心配そうだった。

矢部川上流地域は約７万年前の阿蘇大爆発による火砕流に覆われ、溶結凝灰岩を中心とする火山性の地層地帯が広がっている。今回の土砂災害も豪雨によってこの岩質の弱さが山腹や崖崩壊を引き起こしたとみられている。

九州大学から届いた「九大広報」をめくっていたら、九大アジア埋蔵文化研究センターの田尻義了准教授のインタビュー記事に目が行った。「弥生時代に始まった青銅器の生産。その青銅器の生産に必要な鋳型に注目した斬新な研究が高く評価され、昨年、九州考古学会賞を受賞」と前書きにあり、田尻准教授はインタビューに答えて

> 「鋳型を作った原産地を調べています。石の鋳型は基本的に同一の石でできていますが、その石がどこで採取したものか、よく分かっていませんでした」
> 「八女市の矢部川の石ではないか言われていましたが、誰も科学的な見地で研究をしていなかったのです。そこで鋳型の一部を削った資料でサンプリングしてきた石材を科学的に解析し、完璧に一致するという結果を得ることが出来ました」

弥生文化は稲作の本格的な展開による農耕社会の形成、弥生式土器、青銅器の登場などによって特徴づけられている。佐賀県・吉野ケ里遺跡の銅剣、銅矛、銅鏡などの出土品や鳥栖市での銅鐸鋳型の発掘な

どが有名で、石の鋳型の出土例も多い。青銅器製造は石器に替わる新たな時代を創り出したテクノロジーで有明海沿いから玄界灘沿岸一帯に広がる地域は「弥生のテクノポリス」だったのだ。

青銅器製造技術は中国から伝来したものだが、弥生の工人たちは国産の鋳型を作り独自技術を発展させたことが、科学的に証明されたことになる。鋳型について、これまでの考古学では、肉眼観察の域を出ていなかったが、同研究センターでの、岩石、鉱物、地層、化石など地球惑星科学の研究者と考古学者の合同研究が実を結び、大きな成果を上げたわけだ。

八女市は石灯篭など石細工の名産地として古くから有名だ。現在も道路沿いに石材店がさまざまな製品を展示販売している。「輝石安山岩質溶結凝灰岩」と呼ぶ黒に近い紫と灰色（暗紫灰色）の石材は軽く、軟らか。彫刻しやすいため、この石を材料にした「石の特産品」を生み出したのである。

その特徴を使って石橋も多い。明治から大正にかけて４８石橋も八女市にあるという。明治初期の石工・橋本勘五郎は鹿児島・甲突川の五石橋を作った岩永三五郎の弟子で、熊本の通潤橋を作り上げ、八女市にも洗玉橋（星野川）など名橋を残している。今回の豪雨でこれらの石橋も大きな被害を受けた。

こうした石文化圏ともいえる八女地方の象徴は、遡って、磐井の乱（５２７年）で知られる筑紫君磐井の石人石馬だろう。磐井の墓とされる岩戸山古墳（前方後円墳、全長１３５ｍ）の周辺には武人、馬、武器、祭器などをかたどった石像が多く残されている。石人山古墳の家形石棺の彫刻も見事だ。しかし、石人石馬は首を切られ、あるいは打ち壊されている。勝者、大和朝廷の仕業であろうか。

矢部川沿いの石文化は２０００年もさかのぼり、その文化の流れは営々と今日に受け継がれていることが分かる。溶結凝灰岩という火山性の岩石がこの地にもたしてきた「恩恵」と災害を引き起こす「災禍」。崩れ落ちた山、倒木、川に残る巨石や傷ついた石橋群を見ながら、先人たちも、この岩層の恩恵受ける一方で、災禍をくぐり抜けて逞しく生きてきた２０００年の人々の暮らしを、改めて、思った矢部川行であった。

玉川　孝道（西日本新聞元副社長）
夢アイデア審査委員長（平成 22 年～令和 2 年)